

D. インタビュー記録作成の苦労

原田 越代

今回、私たちが作成したインタビュー記録で苦労した点について、反省を含めて書いてみたい。またこうした反省から、次にいかせればと思うことをあげてみる。

1. テープおこしの苦労

テープおこし（録音テープを聞いて会話を全て書き出す）をしようと録音したインタビューデータを改めて聞いてみると、インタビュー中は感じる事がなかったが、人が話す速度というのは思った以上に速いものであった。会話の速度に書き取りが追いついていくことができず、テープおこしには苦労した。これは慣れない作業に手間取ったということもあるが、夏休み課題として自宅においてインタビュー記録を作成していたために、録音に用いた SONY のポータブルミニディスクレコーダー MZ-B10 ではなく、MD デッキで再生して書き取りを行っていたことが理由としてあげられる。私はテープおこしの段階ではノートに手書きで書き取りを行っていた。MD デッキを用いる際には会話が聞きとれなかったり書き取れなくても、その度に停止を押しては効率が悪いので、5～10 分間ほど停止することなく聞いては書き取る作業を繰り返していた。しかし、この方法では聞き取りにくい箇所を何度も連続して聞くことができず、時間がかかるだけであった。そこで、用いる機器を MZ-B10 に換えてテープおこしを行った。大学の備品で数に限りがあるために数日間のみ借りたのだが、これは再生速度を変える（スピードコントロール）ことができるだけでなく、小型なので机の上に置いて書き取りをしながら操作を行えたため何度も巻き戻して聞くことができ、非常に便利で役立つものであった。ただ、再生速度を変えると再生音声が若干小さくなったので、録音状況は出来る限り良くする必要があるだろう。MD デッキもリモコンを使えば容易に操作できるのだが、リモコンをデッキ方向に向けなければならず、これが面倒であった。また、今回私は MZ-B10 を直接操作しながら手書きでテープおこしをしたのだが、別売りのフットコントローラーを利用すると足で操作できるのでパソコンで打ち込む場合は特に利用すると便利だと思う。

今回の調査において、2004 年 7 月 21 日の渡辺広一さん（仮名）を徳島大学にお招きし、総合科学部 1 号館第 2 会議室にて、7 月 29 日の Z 園（仮名）での調査では、調査協力者のお部屋など静かな場所でインタビューを行えたこともあり録音状況は良かったと言える。しかしそれでも、インタビューする者（interviewer:IR）とインタビューを受ける者（interviewee:IE）の会話と会話のオーバーラップや相づちなどは聞き取りにくいことが多かった。その場にいた時には多少聞き取りづらくともある程度は推察できたことも、時間が経って改めて聞いてみると分からないことが多くなったように思う。インタビューから日が経っていたためにますます記憶が薄れていたのだが、このような場合に、インタビュー中にメモ取りをしていると後々の作業で見返すことができるので「メモ取りは大事」だ

と実感した。さらに明瞭な音声を録音するためにも、外部マイクを使っても良かったのかもしれない。聞き取りづらい部分はあったものの、ヘッドフォンをすると音声が聞き取りやすくなり非常に役立った。

2. 一人称一人語り形式として記述することの苦勞

2-1. 記録作成で分かるインタビューの難しさ

テープおこしで書き出したものを編集する際に、話のつながりや内容に合わせながら会話を一人語りとして組み立てていく作業に苦勞した。インタビュー記録ではあるが1つの読み物として読む人にも分かるように表記することと、IEのその人らしさを失わないように記述することを心掛けた。その人らしさを失わないという点に留意すると、IEの話そのまま使った方がよりリアル感が出たのかもしれないが、インタビューの会話の順序に添わないで書くことにした。というのも、実際にインタビューを行ってみるとつながりのある質問をすることがなかなかできず、会話の順序に添わないで文章を組み立てていく方が良いと考えたためである。半構造化面接だったので必ずしも質問項目に沿って進めるのではなく、IEの話に応じて質問をするようにしていたのだが、会話が様々に広がり、次の質問が思い浮かばなくなってしまう時に上手く用意していた質問項目に移ることができなかったというインタビューの失敗がある。また、気になる箇所があってもIRが深く踏み込んだ質問をためらってしまい、質問をするに至らず後悔することも多かった。相手に断わりを入れてから質問をすることで、より本音に近いお話を伺うことができたかもしれないと思うと質問を制限してしまったことは心残りである。

インタビュー記録を作成していて、気になる発話があってもその時に十分に質問できていない箇所がある度に、相手の琴線に触れるようなインタビューをすることがいかに難しいかを痛感した。これらの反省点をふまえて、事前に相手に対して知っておくべき最低限の予備知識を得ていること、そしてインタビューを行う際には、メモをとることで情報の整理をし、次の質問に繋げることが必要であると感じた。また「メモ取りはメモを取るという目的の他に、次の質問をするまでの会話の空白をうめる」ので、次の質問を考える時間稼ぎとしてもメモ取りは役立つだろう。

2-2. 記述での苦勞 ～相づちと方言の表記、匿名化について～

インタビューのなかでIRの質問をIEが推察し、途中でその質問に対しての返答をすることが多く見られた。この時のIEの返答というのが相づちである時もあったりしたが、インタビューという対話を一人称一人語り形式にする際に、この相づちをIEの発言として扱ってよいのかどうかで悩んだ。結局、IEの発話のように書いたが、それでは不確かであるようにも思う。すべてをIEの発話と表記するのではなく、場合によるということを意識して書くべきであった。相づちもまたひとつの返答ではあるが、さらに質問を重ねることも場合によっては必要だったのかもしれない。どの話でさらに質問を重ねればよいのかという判断は、インタビューにおける注目場面へ臨機応変に対応する上でも重要だと言えよ

う。沈黙ですらひとつの返答であると考え、何に注目して質問をするかが、リアリティあるインタビューにつながるのだと感じた。

その人らしさを失わないように記述する時に、方言をどう表記するかで苦勞した。当初は、読む人にも分かりやすいようにと考え、IE の話をそのまま使うのではなく標準語で表記していた。だが、そうするとリアル感がなく口語で聞いた発話と違った感じになってしまい、その人らしさを損なってしまうように思えた。そこで、表記する時には標準語を用いつつ、方言を残して書くことにした。その人らしさは方言以外のところで表わすという書き方もできたであろうが、話し方などにその人らしさが強くでていることもあるのでどう表記するかも重要だと思った。

インタビュー記録作成にあたり、事前に共通して使う地名や施設名などの固有名詞の匿名をどう表記するか決めていなかったために、作業後、統一するよう手直ししなければならず面倒であった。何度か匿名化に関する話は出ていたのだが、統一しないまま作業に入ってしまったことで後々余分な手間がかかったのは痛かった。共通して使うことが分かっている固有名詞は、あらかじめ話し合うなどしてどう表記するか決める必要があったと反省している。特に、「ローマ字で匿名化する場合は要注意」だと言いたい。というのも、共通する固有名詞の匿名を統一する際に用いることが決まったローマ字が、自分の作成したインタビュー記録では別の固有名詞の匿名化に使われていることがあり得るためである。ややこしく、手直ししていて間違える可能性も高い¹。このようにちょっとしたことをいい加減にしていると、無駄な作業に思わぬ時間を取られてしまうことを、身を持って学んだ。調査協力者のプライバシーを保護するためにも、匿名化は細心の注意を払わなくてはならないので、徹底するよう心掛けたい。また、固有名詞の頭文字をそのままローマ字表記するのは匿名性が守れたとは言えず、調査対象者を知らない人が調べても分からない程度にはしていなければならないことを学んだ。

2-3. インタビュー記録を組み立てる

話のつながりや内容に合わせてながら会話を一人語りとして組み立てていく作業では、テープおこしで書き取ったデータを何度も読み、どう文章をつなげれば読みやすいか、書いては修正を繰り返すという作業を行った。この文章を組み立てる作業は、簡単なようではなかなか難しかった。最終的に原稿として載せているものは、インタビューデータの会話の順序と大きく違っているが、会話の順序に添わないで書いたことで、IE が発言したことではあるが各執筆者それぞれの視点が現れているというおもしろさが出ているのではないかと思う。はじめは、インタビューという対話をどのように一人称一人語り形式として表記することができるのか戸惑ったのだが、会話を組み立てて文章を組み立てていく作業は後々の調査分析を行う上で文章を構成したり、記述することに役立つものであった。またインタビュー記録を作成したことで調査対象者について多くの情報が得られ、状況（文脈）

¹ この原稿を書いた後に、Microsoft Word（私が使用しているソフト）に「置換」機能があることを知った。

に依存した道具の使われ方を見ていくという調査分析の際に、具体的な障害の状態から考えることもできたように思う。

3. まとめ

「研究テーマが決まっても、実際に調査を行うために準備を整えることが、じつはもっとも困難な場合が多い。」(山崎編、2004:60)と言われるが、今回の私たちの調査においては多くの方々に快い調査協力を頂けた。こうした多くの方々によってデータが得られたにも関わらず、お礼状を出すのが遅くなってしまった。今回の調査だけに言えることではないが、今後の方針などをお伝えするためにもお礼状は早く出すようにしなければならなかった。

〈参考文献〉

山崎晶子・菅靖子・葛岡英明、2004「調査の準備とビデオデータの分析法—博物館調査を例として—」山崎敬一編『実践エスノメソドロジー入門』有斐閣、60-70頁